

スラム地区の若者(ブラジル)

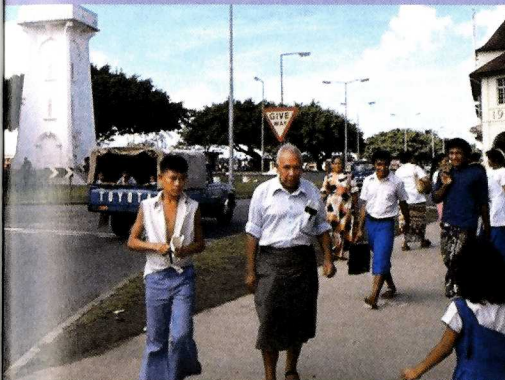
落書きされた車
(アメリカ)



特集

ぐれる

大人、組織、権威に対する青年期の反抗はいつの世にも存在するが、そのかたちは社会の在り方とともに移り変わってゆく。
今や時代錯誤かもしれない「ぐれる」をキーワードに、若者の逸脱の意味をいくつかの社会で考える。



町を用事もないのにぶらぶらしているのは「ぐれる」過剰期の若者たち(ソマリア)

「ぐれる」といわない時代、いえない時代

吉田 憲司
(よしだ けんじ)

本館文化資源研究センター

制度が曖昧に

今号では「ぐれる」というテーマの特集を組むという。なるほど、校内暴力、青少年犯罪、いじめ、不登校、学級崩壊、それに暴走族やシンナー・覚せい剤の使用など、子どもたちや若者たちのあいだに、看過できない問題が広がっている。その一方で、わたしたちが日常生活の会話のなかでそうした現象に言及するときも、「ぐれる」ということばを用いることはほとんどなくなつたように思われる。「ぐれる」から派生したとされる「愚連隊」ということばも、耳にしなくなつて既に久しい。「ぐれる」ということばを容易に使わ(え)なくなつた現代の日本。それは、「リストラ」や「構造改革」が進むなかで、そこから逸脱したり、反発の対象となる社会制

度自体の輪郭が曖昧になつて来ていることと無関係ではあるまい。

成人儀礼と学校教育のはざま

わたしが過去二〇年以上にわたつてかかわつてきた、中南部アフリカのチェワの人びとの社会では、男性と女性とで別個に営まれる成人儀礼を通じて、一人前の人間としてのたしなみが丹念に教え込まれる。その一方で、学校へ通う子どもたちは、今出て行つたかと思うと、すぐに戻つてくることしばしばである。理由を問うと、「先生の家の水汲みや新集めの手伝いをさせられるので、もう先に帰つてきた」などと言つ。子どもたちにはできない家畜や農作業の世話をさせたいと願う親たちも多く、学校教育には必ずしも熱心ではない。「ぐれる」ということばは、そこにはあてはまらない。

こうしたありさまに日々接していると、「子どもは学校へいく」という、われわれにはごくあたりまえのはずの行爲が、じつは決して「あたりまえ」でも「自然」でもなく、ある時代以降、社会が作り上げ、それを構成するものにあてはめてきた制度のひとつなのだというところを、改めて実感させられる。ミシェル・フーコーの指摘するとおり、学校、病院、監獄、動物園、博物館、そして、百科事典。これら、人間や事物を分類して整序する機構

は、一八世紀にいつせいにあらわれ、近代の社会を築きあげてきたものにほかならない。

声にならない声と向き合う

近代が作り出してきたさまざまな制度によつて、今の社会が支えられていることに疑いはない。その一方で、校内暴力、青少年犯罪、いじめ、不登校、学級崩壊などといった「問題行動」とされる子どもたちのおこないが、じつは、彼ら

彼女らに押しつけられた制度や組織のもつ、理不尽さや矛盾を鋭敏にいち早く感じ取つた子どもたちからの、危険信号なのだという点を見落としてはならない。しかも、その制度や組織自体が大きく揺らいでいる現代にあつては、子どもたちの悲鳴が統合され、組織化されて頭在化するまでには至らない。組織化されない悲鳴。だからこそ、大人たちには、今、子どもたちの声にならない声に、より細心に向き合うことが求められている。



チェワの人びとのあいだに見られる仮面結社への加入儀礼=成人儀礼で、長老から訓戒をうける少年。1985年8月、カリザ村、ザンビア。今、大人たちがどこまで子どもたちと向き合えるかに、子どもたちの将来はかかっている

祭りと若者

笹原 亮二
(ささはら りょうじ)

本館民族文化研究部

正調でないカラス族

生来の小心者で「ぐれる」ことは縁遠く生きてきた(?)わたしが、「ぐれる」と聞いてまず思い浮かぶのは、各地の祭りにおいて過剰な逸脱的行為が何かと話題となる若者たちである。

例えば、青森のねぶた祭りの「カラス族」や「カラスハネト」とよばれる若者たち。ねぶた祭りでは、巨大な「組ねぶた」の巡行に笛・太鼓の囃し手と「ハネト」とよばれる踊り手が付き従う。ハネトは花笠・そろいの浴衣・襷掛けの「正装」で、「正調」の囃子に「正調」でハネるとされるが、それとは異なり、思い思いの派手な服装で勝手に巡行に加わり、だから歩きや逆行、一升瓶のもち込みなど、自由気ままに振る舞う正装・正調ではない若者たち

があらわれた。彼らは黒系統の特攻服や半纏の着用が多かったため、カラス族、カラスハネトとよばれるようになった。カラス族は昭和五〇年代には既にあらわれ、次第に増加し、平成一二年には一晩

四〇〇人を超えるに至った。それにともない、彼らによる祭りの妨害、傷害事件や器物損壊が社会問題化した。しかし現在は、巡行方式の変更や警備強化など、当局側の努力でほとんど姿を消したという。

青森のねぶた祭り



祭りのありようの変化

柳田国男は明治三九年にねぶた祭りに遭遇し、「其晩は公認された無礼講で、若い者も老人も自由な騒ぎをする」「(ネブタ流し)と記している。かつてハネトは、ハネ方の決まりも特になく、自分の感情のままに囃子に合わせればよいとされ、家々が振る舞う酒を飲みながらハネ歩いていた。現在も祭りで見られる仮装の踊り手「バケト」も、かつては額に三角の紙を貼った白装束の亡者、赤子と出刃包丁をもった安達ヶ原の鬼婆、おまるのなかに便に似せた食物を入れて食べながら歩くなど、相当過激な趣向を凝らして人気を博していた。

こうしたかつての様相は、ねぶた祭りのこの一〇〇年の大きな変化と同時に、カラス族にもそれなりの系譜があったことを示している。彼らに対する当局の措置は必要かつ全く妥当といえるが、そうした現状への対応だけで十分であろうか。

人びとの過剰さや逸脱を許容し肯定する祭りから、若者たちの許容不可能な過剰さや逸脱を生み出す祭りへ。カラス族の出現を祭りの全体的なありようの変化のあらわれとして、地域社会の歴史のなかで考えてみる必要もあるのではないだろうか。

ブラジルのスラムの若者たち

北森 絵里
(きたもり えり)

天理大学准教授

選択肢の少ない人生

ブラジルの都市貧困地区、スラムに住む人びとの生活は厳しいが、彼らには粗末ながらも家があり電気・水道・プロパンガス、そしてテレビなど家電製品もある。一〇代の若者は働きながら学校に通い週末には友達と遊んで一見楽しそうに日々を過ごしている。しかし、彼らの祖父母も親もそして彼ら自身も、毎日早朝から夕方まで働けど働けど貧しい生活から抜けられない。彼らの心の奥底には将来に対する不安や選択肢の少ない人生に対する不満があらわれている。

五〇代以上は、学校にもろくに通えず非熟練の単純労働や肉体労働に従事し貧しい生活を送ってきたが、彼らには働いたら働いただけの成果が目に見えるかたちで

存在した。つまり、掘った小屋だった家が素焼のレンガ造りの家になり、電気や水道が手に入り、テレビや冷蔵庫を買えるというように生活が良くなったという実感ももてた。それに比べて、一〇代の若者は、すでに家も必需品もそろっており義務教育も修了しており親の世代より恵まれているが、就くことのできる仕事はハードで給料が安く雇い主から一人の人間として尊重されないようなものしかない。彼らは、これからの人生の選択肢には、「コソコソと安い給料で働き続け地道になんとか生きていく」という道しかなく、それが「貧しい者のあるべき姿」だということを直感的に知っている。

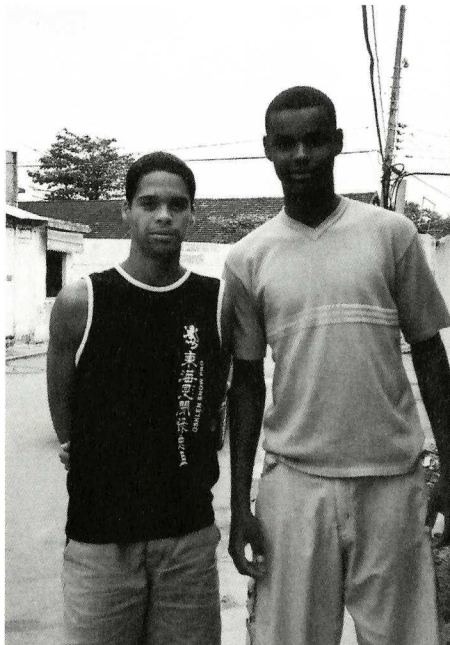
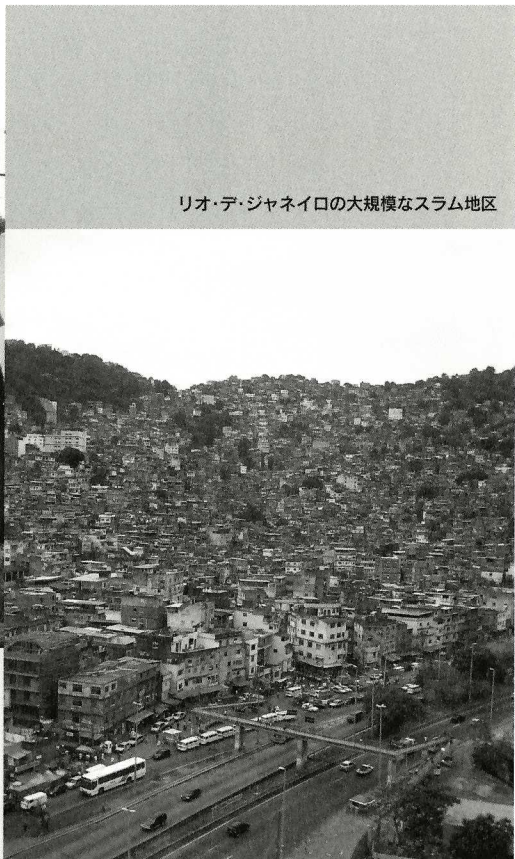
他人より際立つには

スラムの多くの若者が懸命に働き地道に生きている一方で、「貧しい者のあるべき姿」に嫌気がさしてくれた若者は、安い給料でつらい仕事に就き、失業を恐れながら働く「弱々しい自分」から抜け出したいと考える。それで無職になると、次はホームレスになって社会の底辺に落ちていることもあり、ギャングの世界に入り直すこともある。ギャングの世界に入るのには、周囲から一目置かれたいという思いが強いからだ。しかし、他の方法で一目置かれようとする若者も多くいる。たとえば、サッカーの技術を磨きプロか

らのスカウトを目指したり、音楽やダンスの才能を伸ばしてアーティストとして活躍したりすることで、自立する。それによって自分にはできない表現の世界を築くことができる。

いずれにせよ、スラムの若者たちは、どこにでもいる大勢のなかの一人としての自分ではなく、己が生きている世界で他人より際立った唯一の人間になろうと模索している。

リオ・デ・ジャネイロの大規模なスラム地区



手に職をつけて自立したいと語る高校生。ぐれずに生きていこうとがんばっている

特集 **ぐれる**

国家権力が 見下ろす街で

小林 実
(こばやし みのる)

国文学研究資料館プロジェクト研究員

『罪と罰』の舞台

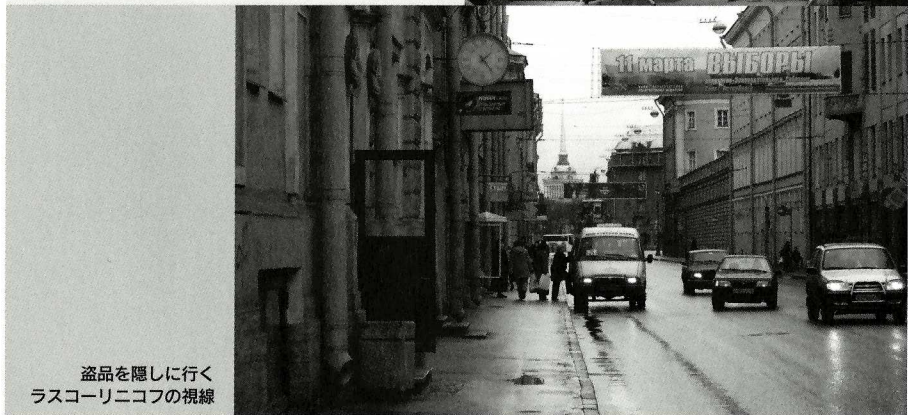
サンクト・ペテルブルグの下町を歩いた。この界隈には、ドストエフスキーの小説『罪と罰』の主人公ラスコーリニコフの下宿のモデルとされる家がある。ラスコーリニコフは、大学を辞め、下宿に引きこもり、やがて非凡人には人倫を越える権利があるという考えにとり憑かれて、金貸しの老婆とその妹を殺害する。

陰険に歪んだように見える彼の思考であるが、実際にペテルブルグの街を歩いてみると、街をさまざまの視線の先には、いつもきらびやかな皇帝政府の巨大な建造物がそびえていたことに気づく。黄金の尖塔をもつ旧海軍省の建物だ。そして彼の下宿は、ちょうどそれが視界から隠れる位置に建っている。

ラスコーリニコフの下宿とされる建物



アレクサンドル2世暗殺の地に建つ「血の上教会」



盗品を隠しに行く
ラスコーリニコフの視線

を残している。

ドストエフスキー最後の傑作『カラマゾフの兄弟』では、野性的な長兄ドミトリー、ラスコーリニコフのような理知の人である次兄イワン、そして善良なものである末弟アリョーシャが登場する。さまざまに入り組んだこの長編叙事詩の核心にあるのは、彼らの「父殺し」をめぐる、それぞれの思惑の衝突にある。「父殺し」とは、文字とおりの肉親殺しであると同時に、「神」の権威をめぐる闘争でもある。作家がついに書き上げることのなかった続編では、三兄弟のなかでもっとも信仰篤いアリョーシャが、革命党の闘士として青年たちを率いる物語が用意されていたともいえる。

反抗相手が強いほど

反抗は反抗する相手が強いほどに、その力を増していく。ドストエフスキーが没した一八八一年、ついに皇帝アレクサンドル二世が爆殺された。後年その現場には、通称「血の上教会」とよばれる荘厳な寺院が建立された。ラスコーリニコフの下宿がある界隈から、運河沿いに二〇分ほど歩いたところにある。

現在では、旧海軍省の尖塔も「血の上教会」も、ともに街を代表する観光スポットとして知られている。

定はできない。若者の出会う場も、ネットコミュニティなどという恐ろしくバーチャルなものだったりするのだ。若者が「ぐれ」てたむろする機会は確実に減少している。

「ぐれ」雑感

山本 真鳥
(やまもと まとり)

法政大学教授

「ぐれる」とは

「ぐれる」の語は平安時代の遊び「貝合せ」からきているという説がある。貝の上下がぴったり合わないとき「ぐり」は「とが」「ぐれはま」とよび、「物事が食い違うこと」「あてが外れること」を「ぐれる」というようになった。それにしても「ぐれる」とは、アナクク(時代錯誤)っぽいことばだ。肩で風を切って歩いているリ―セントのお兄さんをイメージしてしまふ。和英辞典で「ぐれる」という語を見つめる。go astray, stray from the right path (正しい道から逸れる)が並び、「ぐれた若者」として delinquent youngster (非行を働く若者)となっている。いずれにしても、「ぐれ」ているのは若者特有の現象であり、いつかこの

さまざまな社会の若者

と。やがてもとの道に戻るはず。映画「理由なき反抗」のジムは、ラストシーンで父と和解するではないか。

「ぐれる」とは思春期の現象なのだ。急激な心身の成長を伴うこの時期には、親離れも必要。親と別個の人格を確立せねばならず、離床には痛みが伴う。マンネリ化して妥協だらけの親の生き様は見たくもない。事なかれ主義なんて糞食らえ！思春期の逸脱はこの社会にもつきものとされていたが、それに異議を唱えたのがアメリカの人類学者マーガレット・ミードである。彼女は、サモアの少女には思春期の痛みが存在しないが、それは成長や生き方を強要せず、生や死を包み隠さず子どもに見せる暮らしのためとした。しかし、あるサモア人の知識人は、サモアでは感情の表出を禁じており、そのためミードは心の葛藤を見逃したが、サモア人にも思春期の混乱はあると語った。

けれども、我々人類学者の多くは個人主義の発達していない社会で研究をおこなっており、そこで思春期の葛藤を個人の自立や成長と結びつける議論が通用するの、という疑問がある。個の確立していない社会で、個のできるが、プロセスとして「ぐれる」必然性があるのだろうか。

「ぐれ」といふまじきの若者

「ぐれる」ためには仲間が必要だ。暴走族もバイクや車で群れるから暴走族だ。その点で、伝統的社会には年齢階梯の制度があったり、若者組があったりするとは、みんなで「ぐれる」と関係があるにちがいない。

「ぐれる」ということばを最近あまり聞かないのもそうしたことと関係があるかもしれない。いまどきの日本の若者は、価値も多様化し人生のオプションもさまざまで、反発すべき標的も簡単に設

村の教会活動に参加する
サモアの青少年。
「ぐれ」はおくびにも出さない



特集 **ぐれる**